
自立した生活

純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自立した生活

【コード】

N8020Q

【作者名】

純

【あらすじ】

自分達の事は自分でやってよ。

自分の持論を曲げない彼女は何もかも放棄してそこを逃げ出した。

そつした彼女を守るもの、追うもの。

彼女が始めた追いかけっことはどこに行くのか。

そんな彼女の異世界ライフ

始まりは

目を開けたら異世界でしたが、本当にあるとは思わなかった。

その日学校も終わり、彼女はいつも通りの帰り道を歩いていた。夕陽がきれいだと思いつながらの帰り道。

前から走ってくる車のライトが眩しくて目をつぶり、目を開けたら

見知らぬ場所にいました。

自分はいつの間にこんな場所に来たのだろうかと考えながら周りを見回した。

そこに居る人達は何事か話しながら驚愕に満ちた顔をしている。

そして、現在では見慣れない格好をしている。

まるで、昔の西洋の人達が来ていたような…。

「…コスプレ？」

考えていることが口から出ていることも気づかずそのまま状況判断を続ける。

というか狭い部屋なのですぐに見きってしまふ。

最近ではテーマパークでしか見たことがない石造りの部屋だ。

自分が何故ここに居るのか分からないままも気持ちが悪い。

多分、なにかのアトラクションのようなものだろうと思いつながら正確なことを知るためにそこに居る人に状況を聞くことにした。

「あの、すみませんがここって何ですか？」

その言葉にはっとして深々と頭を下げてきた。

「申し訳ございません。」

場所の移動をいたしましょう。」

「…まあ良いですけど。」

彼女は不思議に思いながら、歩きだした一団の後をついて歩きだした。

そうしてついた場所は、そこそこ広くてきれいに整えられた部屋だった。

勧められた椅子に座り話が始まるのを待つ。

正面に座った老人が話しの進行役のようだ。

その彼が話を始めた。

「あなた様は…」

彼女は

あれから1年が経った。

そんなことは無いと抵抗をした。
だけど駄目だった。

だから認めたふりをして時期を待つことにした。
それをやるために色々を条件を付け、
協力してくれる人を探し、資金を集め、この国の事を勉強した。
諦めたふり、だけど私は何も諦め無かった。

「神子様、お時間でございます。」

侍女のその言葉で私は座っていた椅子から立ち上がり、彼女の後について歩きだした。

そうなのだ。あの日あの時にいきなり神子と告げられた。
違うのに、私は普通の人なのに。

そして神子だから、特別な方だからと役目を押し付けられた。
残念ながらお告げも何も受けたところも無い。

「本日の予定はお祈りの時間の後、軍の施設への激励に訪問となっております。」

それからは自由のお時間になっております。」

「…分かりました。」

そして今日がその日だ。

こんなバカげたことから抜け出す。

そのためだけに我慢してきた。

今日という日が終わったら私はここに居ない。

その夜

その日のやることもすべて終わり、私は部屋に戻ってきた。

「すみませんが、今日はもう下がってくださいです。」
「分かりました。では失礼します。」

侍女をすべて下からせ部屋に一人になった。

きつと見送る顔は無感情であろう。

ここに居た一年間、まったくといって馴染もうとはしていない。

完全に出て行ったことを確認してから視線をドアから外した。

そしてクローゼットに入っていく、あるものを取りに行った。

それは隠してあった荷物だ。

侍女の制服、いわゆるメイド服とこの世界に来た時に来ていた服。

高校の制服とバック。

帰るときに必要ななるから持っていくと決めていた。

制服をリュックに入れ、持っていくものも入れていく。

あまり大量に持っていくと邪魔になるからなるべく少なめに。

そうこうしているうちに約束の時間だと思いメイド服に着替え始める。

着替えが終わり迎えが来るのを待つ。

待っている間が何とも長く感じる。

私は落ち着くために椅子に座り目をつぶって待つことにする。

焦って失敗したら次は無いのだ。

ふと、小さくドアのたたく音が聞こえる。
協力者だと思いが念の為、確認をする。

「はい。」

「私です。開けても？」

「どうぞ。」

その声にそつとドアが開いた。

そこから顔を出したのは協力者の騎士だ。
彼はそつと中に入ってきてドアを閉めた。
そつして告げた。

「神子様、お時間です。」

月が見えない日

迎えに来てくれた騎士と一緒に誰も歩いていない廊下を歩く。

シャイア神では月の見えない日に活動することを禁じられている。

シャイア神。

それが私がここに呼ばれた元凶だ。

シャイア神を唯一の神とし太陽を神の分身として信仰している。

神子は体のどこかしらに太陽に見える痣があることが条件だ。

そして神子になる条件をクリアした存在がいなかったため、召還をしたと言われた。

宗教があまり盛んではない国出身には分からない。

分からないからの反発。

そして恐れが無いからの行動。

ただの新月に何を恐れることがあるのか。

私と騎士は隠し通路の入口に急いだ。

活動が禁じられているとはいえ、あまり音をたてたりするとまずい。

そんな事で失敗はしたくないのだ。

もし誰かに見つかったら見えないようにとメイド服を着たのだし。

誰にもばれないでいる入口に着くことが出来た。

そっと仕掛けを動かし通路を開くことができた。

「神子様、入口に。」

「ありがとう。あなたも早く。」

その言葉に騎士はすりと入口に入り仕掛けを元に戻した。

これで第一段階はクリアしたことになる。

あとは外に出るだけ。

月が見えない日（後書き）

説明文ばかりですみません。

読みづらい事この上無いですね…。

通路にて

暗い通路の中、ランプを手に進む。

「暗いのでお気をつけください。」

「大丈夫。」

その会話を最後に黙々と進んでいく。

何度か角を曲がったところで行き止まりになった。

仕掛け扉になっている。

仕掛けを解除してから外に出るための階段を上がっていく。

そして外に出るための入口にたどり着いた。

騎士が扉を薄く開けて外を確認をしている。

「大丈夫です。」

「さあ、いきましょう。」

「ええ、お願いします。」

騎士の手を取ってそつと外に出る。

ほっと息をついてしまう。

通路は息が詰まる感じがしたのだ。

そのまま、道を進んでいき騎士が準備していた隠れ家に向かう。

そこまで気を抜けないのだ。

温もり

月の無い夜の、誰もいない道を二人進んでいく。

手、は繋いだまま。

神子になってからは決められた人以外とは話すこともできなかった。触れることも無かった。

もちろん世話をしてくれている人たちがいた。

けれど私を閉じ込めていた人達には何も感じなかったのだ。だから人の温かさが懐かしい。

あちらでは家族と、友達と何気ない触れ合いがあった。

こちらで奪われてからその大切さに気付いた。

そんなことを考えていたからだろう、少し寂しくなりつついつい繋いだ手に力を入れてしまった。

あ、っと思つて力を抜こうとしたが彼の方からもしっかりと握つてくれた。

おそろおそろ顔を見上げれば、彼は前を向いたまま警戒を怠っていない。

こちらを向かない顔。

でも嬉しかった。

隠れ家に

手、を繋いだまま木々の中を進んでいく。

隠し通路がある場所は森の中だ。

これまで家は一軒も無い。

だから今回の計画で使うことにしたのだ。

どのぐらい歩いただろうか。

感覚的には1時間ぐらい歩いたと思うが緊張していたので正確な時間は分からない。

だけれど、やっと着いた。

ひとまずの隠れ家へ。

「神子様、こちらでしばしお待ち下さい。」

「…はい。」

繋いだ手が離される。

そしてさっと、隠れ家に危険が無いか確認へ行ってしまった。

そして私は、繋いでいた手を見てしまう。

ずっと繋いでいたのだ。

お互いの体温が同じになっていて、繋いでいた手が寒い…
そして寂しい。

だけれど今だけだと思って、そっと両手を握りしめる。

「神子様、大丈夫です。」

行きましよう。」

「ええ、お願い。」

そっと手を差し出す。

少ししか距離は無いがそれでも。

騎士も何も言わずに握り返してくれた。
そっと促されて隠れ家へ足を進めた。

家に入って

木で造られたドアをそつと開ける。

誰もいないことは分かっているが何気ない行動だ。特に自分たちが逃げているからだろう。

隠れ家に入り、無意識に息を吐き出してしまふ。やはり力が入っていたのだろう。

「神子様、着替えが終わりましたら

夜のうちにこちらを離れましょう。」

「分かりました。」

「服はあちらにありますので。」

「着替えてきます。」

騎士の元からそつと離れ着替えを手に彼から見えない場所へと移動する。

変装用の服は男の服だ。

子供の。

一瞬止まってしまった。

だって一応妙齡の女性なのだ。

東洋人は若く見られるからといってこれは…。

でも、変装だと思い直して着替えを始めた。

向こうからも衣擦れの音がするから騎士も着替えているのだろう。その音を意識しないように手早く着替えていく。

ズボンとシャツにベスト。
だぼっとしていて体のラインが消えている。
これならばっと思は分らないだろう。
鏡はないがこれでいいだろう。

「着替え、終わりました。」

「こちらも終わっています。」

それを聞いて騎士のもとへと戻っていく。
そっとな彼を見る。

彼はズボンとシャツといった一般的な男性の服装をしていた。
騎士の制服以外の格好を見るのは久しぶりだ。

「…久しぶりにみた。」

「そう、だね。久しぶりだ。」

そういって顔を見やっして笑いあった。

本当の出発

その会話で神子と騎士では無くなれた。

今までずっとずっと戻りたかった関係。

だから自然と神子の仮面がとれたのだ。

「ねえ、そろそろ出た方がいいんじゃない？

朝になればさすがにばれるだろうし。」

「そうだな。」

その前に今まで来ていた服をこの袋に入れて。」

そう言っただけで彼は私の前に袋を出した。

私はそれに、神子服を入れながら

この行動の意味を知りたくて理由を聞いた。

「何するの？」

「この家と一緒に燃やそうと思って。」

「え？でも今日にそんなことしたらばれちゃうよ。」

「大丈夫。」

ちよっとした裏技を使って、明日に火の手が回るようにするから。」

彼はそう言っただけで私たちの服を戸棚に詰め込んだ。

そして数歩私のところまで戻ってきて手を差し出した。

「行くっ。」

その言葉は私の求めていたもので、願ったものだ。

涙が出そうだ。

でもそれをこらえながら私はその手を握り返した。

「うん。」

私たちは手を繋いだまま外へと進み始めた。

彼について

「これからどうしたい？」

隠れ家から少し来たところで彼がそう尋ねてきた。

それがあそこから出てきたことを実感させてくれる。

「こことは違うところ。」

私が神子じゃなくいいところに行きたい。」

抽象的だが、ここにきてからの願い。

それを彼に伝えた。

その言葉を聞いた彼は繋いでる手を力を込めてキュウッと握りながら言ってくる。

「うん、行こう。」

それで色々な物を見て、色々なことを聞いていこう。」

「…うん、うん。」

ありがとう。でも響くんはそれでいいの？」

「それでいい。」

春と一緒に生きたい。」

そう、彼は騎士だった彼は木内響と言ってこちらに来てしまった人なのだ。

私と響君は付き合っていて、一緒に帰っていてそして巻き込まれてしまった。

そして神子ではない彼を追いやるうとしたから私は我儘を言って彼を私の騎士とした。

私が悪い訳ではないけど、私の所為でこちらに来てしまった人。

それでも彼を離せなかった。
だってずっとずっと好きで。
いまでも一緒に居たい人だから。

私について

そして私は、森野春。

一年前までは普通の高校生だった。

そして今は、神子と言われる存在だ。

シャイア神の神子たる証の痣は確かにある。

子供の頃から背中にあつた。

それは響君も見ている。

初めて見たときにきれいな痣だとほめてくれた。

私もそれまでは好きな部位だった。

好きな人がほめてくれて、そして何か神秘的な痣。

でも今は、まったく好きではない。

むしろ忌々しいぐらいだ。

たまたまあつただけなのに。

それだけで自由もなにもかも無くした。

たとえ本当に神子だとしても、そんなことは知らない。

自分たちの世界を、自分たちでなんとかするのが道理のはずだ。
だから私は自分の為に生きていく。

そうするために違うところに行くのだ。

そうして前を向いて歩いていく。

「髪を、髪を切るうかと思ってるんだけど。」
唐突に私は切り出した。

前々から考えていた事なのだ。

髪が長い私をあその人たちは知っている。
だからイメージを変えると意味も含めて。

「だからどこかで切らせて？」

きつと納得してくれると思って、そう言って響君を見上げた。

「駄目。」

「ふえ？な、なんで？」

「春の髪はきれいだし、長いほうが好きだから。」

対応

そんなストレートな言葉を言われたら恥ずかしい。
春は顔を赤くして、下を向いてしまった。

「それは…ありがとう。」
顔が熱い。

「で、でも、印象が変わるだけでも違うよ。」
「うん、でも切るのはやめて。」
春の髪、好きだし。」

響君って頑固なんだよね。

春は響の性格上、撤回は無いと思い髪を切ることを諦めた。

「分かった。迷惑を掛けちゃうかもしれないが。」
「大丈夫。守るよ。」
朗らかに笑いながらのその言葉は強力だ。
春はまた顔を赤くしてしまった。

「春の安全は守る。」
それ以外は一緒に頑張ろうね。」
「うん。頑張る。」

響の良いところは自分にも参加をさせてくれることだ。
全てを引き受けるのではなく、自分にも責任を与えてくれる。

神子と呼ばれていた時、中心にいたけれど蚊帳の外だった。
彼らが欲しいのはただの器だ。

あそこは、敬われていたようで無機質な対応だけ。

それは私で無くてはいいのだ。

対応（後書き）

大変お久しぶりです。

更新が止まってしまいすみませんでした。

これからは少しずつ更新をしていきたいです。

よろしく願います。

旅支度（前書き）

話の途中で投稿させてしまいました。

読んでしまった方がいましたら、すみませんでした。

すごい中途半端で止まってて「なんだこれ」って感じだったと思います。

今後気をつけます。

それでは楽しんでもらえたら幸いです。

旅支度

そうこうしているうちに、近くの村に着いたようだ。

春はこちらに来させられてから、一度も外に出たことは無い。だから一般的な大きさがどのぐらいなのか分からないがたぶん小さな村だ。

ここで何かしら調達をしなければこれからの旅で必要になる。

「ひとまず、旅の装備をそろえないとね。」

「そうだなあ…あんまり金使わない方が良いから必要最低限にしようか。」

それで良いかな？あんまり贅沢はさせれないけど。」

「大丈夫！大丈夫なんだけどね。」

…ワガママになっちゃうんだけど護身術を教えて欲しいの。

それで出来ればナイフとかを与えて頂きたいと…。」

「…それは、俺が信用できないってこと？」

その言葉は思いもしなかった言葉だ。

春はとつさに首を振って否定をした。

自分の望んだことは彼を否定することだったのだろうか。だから春は自分の気持ちを伝える。

「違う！違うよ！」

もしも響君がけがでもしたら今度は私が守るんだよ。

あと、調理用のナイフも欲しいし。」

響は一瞬瞳目をして、そして笑った。

なぜ笑うのか分からない。

不満気な顔になってしまふ事は許してほしい。

「ごめん、おかしいんじゃないやなくて嬉しかったんだ。

そうだね。ちょっととした護身術を教えておこうか。

でもナイフは調理用だけにしとこうか。

そっちはおいおい考えていこう。」

誤解を解けたことに春は安心をした。

好きな人との仲違いはしたくない。

「うん。」

「じゃあ、行こうか。」

響と手を繋ぎ、旅用品を求める為に村の雑貨屋に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8020q/>

自立した生活

2011年10月13日22時52分発行